

令和3年度 在宅医療関連講師人材養成事業
(訪問看護分野)

好事例集

在宅医療関連講師人材養成事業（訪問看護分野）

（令和3年度厚生労働省委託事業）

【事業目的】

地域で在宅療養者を支える訪問看護人材の確保・質向上のための研修会を企画・開催し、地域で訪問看護人材の育成を支援できる人材を養成する。また、研修受講者の活動状況を調査することで、事業の効果を検証し、地域における訪問看護人材育成の支援に活用する。

【事業概要】

検討委員会の開催（全2回）

<検討事項>

- ・研修プログラム内容および研修会開催方法の検討
- ・研修会受講後の活動に関する調査内容および調査方法の検討
- ・在宅医療関連講師人材養成事業の効果検証

研修プログラム作成および研修会の開催

<対象者と受講人数>

- ・看護師102名及び行政職員52名（42都道府県）

<開催方法>

- ・オンデマンド配信の講義動画の視聴
- ・視聴後、Webのライブ配信によるグループワークを開催

フォローアップ調査の実施

<調査対象者>

- ・研修を受講した、看護師102名および行政職員42名

<調査内容>

- ・地域での研修会開催や講師活動に向けた会議の有無
- ・研修受講後の活動内容、研修受講者の活用状況
- ・研修受講の効果、地域での研修会開催や講師活動における課題

<回収率>

- ・看護師93名（91.2%）、行政職員37名（88.1%）

令和2年度受講者に対する追跡調査の実施

<調査対象者>

- ・令和2年度の研修受講者のうち、研修会の開催や活動をしなかった受講者47名

<調査内容>

- ・令和3年2月以降の地域での活動や研修会の開催状況

<回収率>

- ・35名（74.4%）

【事業成果】

受講後の活動成果

①学んだことを活かした研修会の企画・運営ができた

- ・地域の課題を皆で抽出でき、研修を企画することができた
- ・効果的なグループワークと講師人材を活用した研修企画ができた
- ・研修目的に沿った講師依頼ができた

②地域の実情に沿った研修会を企画・開催できた

- ・現場の状況を把握し、必要な取り組みを検討することができた
- ・地域の課題を共有することにより、支援の方向性について理解を深めたうえで研修企画ができた

③地域の中の関係機関のネットワークができた

- ・地域の課題について県や訪問看護ステーション協会の担当者と一緒に取り組むことができた
- ・受講者と県担当者が顔の見える関係ができ、訪問看護を行う看護師が課題と感ずることを研修に活かすことができた

④追跡調査対象者の60%が令和3年度までに活動していた

- ・令和2年度に活動した人が5.7%、令和3年度に活動した人が54.3%

好事例のまとめ

研修受講後に効果的な活動を実践している地域を5事例選定し、地域の現状・研修会開催の過程・成果や課題について整理した

- 障害・知的・精神障害の施設への感染予防対策に向けた勉強会の開催
- 病院と地域をつなぐ看看連携のための研修会の開催
- 「人生会議」の普及・定着に向け訪問看護を行う看護師と多職種が連携を深める研修会の開催
- 複数の訪問看護ステーションによる共同体制の構築に向けた研修会の開催
- やりがいのある精神科訪問看護を目指した研修会の開催

地域の状況

- 東京都三鷹市の人口は約19万人、精神科専門の大病院が2か所ある
- 障害・知的・精神障害者は毎年増加傾向にある
 - 市内には障害者の通所施設が8か所、グループホームが22か所、入所施設が4か所ある
 - 身体・知的障害の利用者が利用しているデイサービスやショートステイが新型コロナウイルス感染症の発生により休止され、訪問看護でカバーしている

成果・課題

- **成果**
 - ・ 一連の研修会開催により、食堂のパーティションの長さの変更、共有部分の物の整理、換気の方法など、適切に変更されていた
 - ・ 質問の内容が抽象的ではなく自施設の実情に合わせた内容に変わった
 - ・ 感染対策の講義を行うことによって、地域において感染予防対策を推進していく必要性に対する主催側の意識の向上につながった
- **課題**
 - ・ 演習で行ったガウンテクニックや手洗い方法に関しては、今後、動画や手洗いチェックを貸出して、研修受講者だけでなく、職員全員に実施してもらいたい
 - ・ それぞれの施設に合わせた勉強会の提供は思った以上に時間がかかってしまうため、運営方法の検討が必要

研修会開催までの流れ

現状把握

- 障害・知的・精神障害の利用者は週3～4回通所したり、毎月ショートステイを利用するなど、他の利用者とは比べ施設利用が多く、感染の可能性が高い
- 地域内の各施設の感染予防対策にばらつきがある

要因分析

- 障害・知的・精神障害の利用者の特徴として、マスクの着用など感染予防対策の徹底が難しい
- 各施設の感染予防対策や職員の知識の程度がわからない
- 市内の精神疾患対象のデイケアやグループホーム間の日常的な連携が不十分

課題解決の方策

- 施設職員の感染予防に対する意識を高め、施設における感染予防対策を徹底する
- 地域で働く仲間として、感染予防に対する基本を学びアイデアを出し合う機会を作る
- 現場を視察し、施設に合わせた感染症対策の提案をする

地域のニーズ

地域の介護事業所・施設が正しい感染予防対策を行い、サービス提供が滞らないようにする

感染予防の徹底が難しい利用者を受け入れるための感染予防対策マニュアルを施設ごとに作成する支援をする

研修会の開催

- **日時・内容・方法**
 - <①見学、②集合研修、③zoom配信>
 - ①12月2日：現行の感染予防対策、職員の知識量を確認
 - ②12月23日：ガウンテクニック・手洗い方法の講義と演習（4名）
 - ③2月17日：上記①②をもとにまとめた各施設の感染予防対策について講義
- **目的**

クラスターを発生させない、または最小限にとどめる対策が取れるための知識と技術を身につけ、施設オリジナルのマニュアル作成につなげる
- **参加者**

市内グループホームのチームリーダー7名

研修会の内容の検討

- **研修の目的の設定**

障害施設における感染予防対策を行い、クラスターを発生させない、または最小限にとどめる対策が取れるための知識と技術を習得する
- **研修内容の設定**
 - ①施設を实地見学し、実際に行われている感染予防対策や職員の知識量について確認する
 - ②正しいガウンテクニック・手洗い方法の講義と演習を行う
 - ③上記①②をもとに各施設の感染予防対策をまとめ、チームリーダーにオンライン講義を行う
- **対象者の決定**

市内障害施設系・通所系サービスの介護支援員
- **講師の選定と依頼**

自事業所の訪問看護認定看護師、感染対策マネジャー（東京都看護協会）の2名

病院と地域をつなぐ看看連携のための研修会の開催 ～地域包括ケアシステムにおける看護師の役割～

地域の状況

- 訪問看護ステーションの設置地域に差がある（県内84か所中、新川医療圏には6か所しかない）
- 看護職員の常勤換算数5人未満の小規模事業所が65%である
- 全国平均より高齢化率が高く、全国と比較して約20年早く高齢化が進むと予測されている

研修会開催までの流れ

現状把握

- コロナ禍で、退院時カンファレンスが開催できていない
- 退院時の看護サマリーの内容が乏しいまま訪問看護が開始されるため、利用者の状況把握までに時間を要する
- 病院と訪問看護事業所との連携が不十分である

要因分析

- 病院に勤務する看護師と訪問看護を行う看護師との情報伝達の機会が減っている
- 病院に勤務する看護師が、退院後の患者の療養イメージが持てず、在宅療養に必要な情報を提供できていないのではないか
- 訪問看護を行う看護師と病院に勤務する看護師の役割が共通理解できていない

課題解決の方策

- 病院に勤務する看護師が在宅療養のイメージを持てるような研修会を開催する
- 病院に勤務する看護師と訪問看護を行う看護師双方の役割について意見交換ができる場をつくる



患者の退院後の療養生活をスムーズに進めるための情報交換ができる体制を構築する

地域のニーズ
病院から退院後、在宅までの連携がスムーズになり、利用者にシームレスな看護が提供できるようにする

成果・課題

- **成果**
 - ・病院と訪問看護ステーションとの情報交換の場となり、それぞれの役割を共通認識できた
 - ・病院に勤務する看護師・訪問看護を行う看護師双方が看看連携に興味をもつ機会になった
 - ・集合研修と遜色なく運営できたので、今後オンライン研修を企画する下地ができた
- **課題**
 - ・今回、訪問看護側からの事例提供のみであったため、今後は病院からの事例提供もできるようにしたい
 - ・在宅での療養生活のイメージを持ってもらうためには、病院に勤務する看護師が退院後訪問を積極的におこなうことが必要
 - ・今後は、退院後の情報共有について、病棟・外来・訪問看護間の体制作りが必要

研修会の開催

- **日時**
2022年2月26日（土）13:00-15:00
- **テーマ**
病院と地域をつなぐ看看連携
～地域包括ケアシステムにおける看護師の役割～
- **目的**
病院に勤務する看護師と訪問看護を行う看護師がそれぞれの役割を理解し、連携を図る
- **内容・方法**
＜ZOOM配信・グループワーク＞
①講義「地域包括システムにおける看護師の役割」
②事例提供（2事例）
- **参加者**
病院に勤務する看護師（17名）、行政職員（1名）、訪問看護を行う看護師（27名）

研修会の内容の検討

- **研修の目的の設定**
患者が退院後にスムーズに在宅療養ができるよう、病院に勤務する看護師と訪問看護を行う看護師が連携を図ることができる
- **研修の目標の設定**
訪問看護認定看護師、訪問看護事業所の管理者が現状をふまえ、双方が連携の大切さを理解する
- **対象者の決定**
病院に勤務する看護師、訪問看護を行う看護師
- **講師の選定と依頼**
訪問看護事業所の管理者兼訪問看護認定看護師
- **役割分担**
講師依頼、研修会準備、ファシリテーター：富山県訪問看護ステーション連絡協議会

「人生会議」の普及・定着に向け、 訪問看護を行う看護師と多職種が連携を深める研修会の開催

地域の状況

- 人口1,957,534人
- 訪問看護ステーション数 196か所
- 全国的に訪問看護が必要な人は2025年までに47%増と推計されており、当地域では、在宅医療の推進により在院日数が短縮しているため、在宅療養者の増加が見込まれる
- 岐阜県メディカルコントロール協議会の設置があり、メディカルワーキングチームとして、訪問看護ステーション連絡協議会も参加している

成果・課題

- 成果**
 - ・研修後アンケートでは、基本的知識を習得でき、直ぐに現場に役立てられるという反響が多かった
 - ・地域にいる多職種の存在を再認識でき、それぞれの立場でどのように「人生会議」を実践しているのかを知ることができた
 - ・「人生会議」の普及・定着には、訪問看護ステーション単独ではなく、地域の多職種で協働していくことが重要だと確信できた
 - ・関係団体と協力しながら研修の企画と開催を行うことができ、今後の研修体制作りにつながった
- 課題**
 - ・単発の研修ではなく、次回に繋がるとともに、数年先を視野に入れた計画を検討していく必要がある
 - ・地域で活躍する多職種・多機関と定期的に地域課題を共有していく必要がある

研修会開催までの流れ

現状把握

- 当地域における「人生会議」の実態調査を実施した結果、多職種間で「人生会議」について考える機会がない、基本を学びたいという意見が多かった
- 行政や多職種から、「人生会議」を学ぶ場について、訪問看護ステーション連絡協議会に問い合わせがある

要因分析

- 地域における多職種での共通した「人生会議」の知識習得ができていない
- 各職種の現場での「人生会議」への取り組み実態が共有できていない
- 地域での「人生会議」への取り組みに関する周知の機会が少ない

課題解決の方策

- 多職種で「人生会議」の学びを深める機会を確保できるよう、関係団体と研修内容について検討する
- 研修の開催主催となる者も共に学ぶことで、地域への学びに発展させる



多職種向けに動機付けとなるようなACPの基礎となる内容の研修企画を行い、「人生会議」が地域で定着されるよう継続研修を先を見据えて開催できる体制を作る

地域のニーズ

誰もが住み慣れた地域で、最期のときまで安心して暮らせる社会の実現のために訪問看護師と多職種の連携が必須

研修会の開催

- 日時**
2021年11月21日13:30～15:45
- テーマ**
「知ってる？人生会議」～‘その人らしさ’が輝くためのACP私たちにできること～
- 目的**
地域における人生会議の実態を知り、多職種がそれぞれの取組を共有する
- 内容・方法**
＜集合研修とZOOM配信＞
講義及びグループワーク
- 参加者**
当日会場30名+オンライン64名
医師、行政職員、ケアマネジャー、看護教員、消防士、訪問看護を行う看護師、病院に勤務する看護師、理学療法士

研修会の内容の検討

- 研修の目的の設定**
「人生会議」の普及・定着に向け、訪問看護を行う看護師と多職種が共有し連携しながら、誰もが住み慣れた地域で、最期のときまで安心して暮らせる社会の実現に繋げていくこと
- 研修の目標の設定**
各職種の現場でどのようにACPの取組がなされているか、実態を知る
- 対象者の決定**
訪問看護を行う看護師、多職種 等 150名程度
- 講師の選定と依頼**
大垣市在宅医療・介護連携推進事業 人生会議部会、本人の意思を尊重した意思決定のための相談員研修受講者、本研修受講者
- 役割分担**
 - ・岐阜県訪問看護体制充実強化支援事業：費用負担
 - ・岐阜県訪問看護ステーション連絡協議会：講師との連絡、会場確保と準備、案内送付、アンケート作成集計、資料準備 4

複数の訪問看護ステーションの共同体制の構築に向けた研修会の開催 ～災害発生時や感染症流行時の具体的な取り組みに向けて～

研修会開催までの流れ

地域の状況

- 南北に伸びる細長い形をしており、伊勢湾から熊野灘へと、多くの市や町が海に面している
- 30年以内に南海トラフ地震が発生する確率が高く、津波などの甚大な被害が予想されている
- 県内の訪問看護ステーション数は192ヶ所あり、多くのステーションが小規模事業所である

現状把握

- 訪問看護ステーション間の共同体制の多くは管理者間の関係性が多い
- 平時における複数訪問看護ステーションの連携はあるが、有事における共同体制については構築されていない

要因分析

- 訪問看護ステーション間で有事の対応について話し合いがなく、考え方にばらつきがある
- 管理者の話し合いだけでは、事業所としての組織的な連携に繋げることが難しい
- 平時においても、訪問看護ステーション同士の連携が十分になされているとはいえない

課題解決の方策

- 有事において具体的にどのような連携が必要であるか、訪問看護ステーションの管理者と職員が理解するための研修を行う
- 具体的な取り組みを学ぶことで、事業所間の連携への前向きな行動に繋げる

↓

災害発生時や感染症流行時の複数訪問看護ステーションの共同体制を構築する

地域のニーズ

複数訪問看護ステーション間の共同体制を構築することで、災害発生時や感染症流行時に多くの人命を救う

成果・課題

- **成果**
 - ・ 今回の研修を通して、複数訪問看護ステーションの共同体制の必要性についての共通理解が進んだ
 - ・ 実際の取り組みを聞くことにより、複数訪問看護ステーションの共同体制構築に向けて、より具体的に動くとする事業所が増えた
- **課題**
 - ・ 複数の訪問看護ステーションの共同体制の構築について意識が高まっているうちに、体制を整える必要がある
 - ・ 訪問看護ステーション協議会会員118ヶ所の事業所に対し、共同体制の構築とシステムの実用化に向けて積極的に取り組むための支援が必要である

研修会の開催

- **日時**
令和3年11月9日（火）18:00～19:30
- **テーマ**
神戸市の訪問看護の経験を共有し、三重県での新型コロナウイルス感染症第6波に備える
- **目的**
新型コロナウイルス感染症蔓延時の訪問看護ステーションの共同体制について具体的な取組を学ぶことで、事業所間の連携への前向きな行動に繋げる
- **内容・方法**
＜ZOOM配信による講演＞
神戸市における第四波新型コロナウイルス感染症の自宅療養・入院待機者への訪問看護の経験について
- **参加者**
訪問看護ステーション管理者及び訪問看護を行う看護師70名

研修会の内容の検討

- **研修の目的の設定**
複数訪問看護ステーションの共同体制の具体的な方策について学ぶ
- **研修の目標の設定**
災害発生時（新型コロナウイルス感染症）に複数訪問看護ステーションが共同体制で対応した事例から自事業所の取り組み方を学ぶ
- **対象者の決定**
訪問看護ステーションの管理者及び職員
- **講師の選定と依頼**
新型コロナウイルス感染症において共同体制を経験した訪問看護ステーション管理者
- **役割分担**
三重県訪問看護ステーション協議会主催

やりがいのある精神科訪問看護を目指した研修会の開催 ～訪問看護ステーション間の情報共有と理論的な看護提供プロセスの理解～

研修会開催までの流れ

地域の状況

- 北部地域は精神科訪問看護に特化した訪問看護ステーションがなく、地域で生活する精神障害者を支援する精神科デイケアやグループホームが少ない
- 中北丹地域の訪問看護ステーション24ヶ所のうち5割（12ヶ所）が精神科訪問看護を行っている

現状把握

- 精神科訪問看護を提供している利用者へのケアに自信がなく、悩みながら行っている
- 精神疾患をもつ利用者の症状再燃や再入院により、訪問看護師のやりがいを見出しにくい
- 精神科訪問看護は難しいというイメージがあり、精神科訪問看護を行っていないステーションが多い

要因分析

- 精神科訪問看護について理論的に具体的なケアのプロセスを学ぶ機会がない
- 近隣の訪問看護ステーション同士の連携が普段から希薄である
- 精神科以外の訪問看護の場で、精神科訪問看護の技術を使っていることに気づいていない

課題解決の方策

- 精神科訪問看護のプロセスを理論的に学べる研修会の開催
- 近隣の訪問看護ステーション同士が日々の悩みを共有できる機会を持つ
- 精神科に限らず訪問看護を行う看護師が活用できるコミュニケーション技術等について意識化する



近隣の訪問看護ステーションと連携を図り、精神科訪問看護の質の向上を図る

地域のニーズ

精神に障害を持つ利用者が自分らしく地域で生活するための訪問看護を提供できるようにする

成果・課題

● 成果

- ・研修会後のアンケート結果では、講義の満足度は84%と高く、「セルフケアを把握する枠組みやYesを引き出すコミュニケーションなど早速明日から活用したい」との回答もあり、実践的な研修であった
- ・近隣の訪問看護ステーションの仲間が同じ悩みや思いを持って訪問していることが共有できた
- ・精神科訪問看護を行っていない事業所からも参加があった

● 課題

- ・精神科訪問看護の現状を行政にも発信し、共有していく必要がある
- ・近隣の訪問看護ステーション同士の研修交流を継続する必要がある

研修会の開催

- **日時**
2021年12月18日(土)13:30～16:00
- **テーマ**
精神科訪問看護の型と技
- **目的**
精神科訪問看護の技と型について学び、訪問看護を行う看護師の支援として、普段のかかわり方について振り返り、訪問看護ケアに生かす。
- **内容・方法**
<ZOOM配信>
 - ・ 講義（チャット機能を使い参加型研修）
 - ・ 参加者の訪問看護のケアでの悩みや疑問について講師より回答
- **参加者**
訪問看護を行う看護師48名

研修会の内容の検討

- **研修の目的の設定**
日々の精神科訪問看護での悩みや疑問を共有し、アセスメントの視点や支援のプロセスを学ぶことでケアの質向上を図る
- **研修内容の設定**
 - ・ 精神科疾患の理解、精神科訪問看護の考え方や展開方法について講義をする
 - ・ 日々のケアの悩みや疑問を共有する場を作る
- **対象者の決定**
研修後の訪問看護ステーション同士の連携や相談が行いやすいよう、中北丹支部の訪問看護ステーションの看護師を対象とする
- **講師の選定と依頼**
精神科認定看護師である訪問看護講師への依頼は、訪問看護ステーション協議会地区理事が行う